

新任あいさつ

理事長 大熊 幹章

4月1日付けで理事長に就任いたしました大熊でございます。

創設以来100年、我が国の森林・林業・木材研究をリードしてきた巨大な組織、独立行政法人森林総合研究所の責任者に着任することは、私にとってまさに青天の霹靂（へきれき）でありました。その責任の大きさに身の引き締まる思いです。しばらくは部外者的視点で勉強する他ないと開きなっております。

私は、東大、九大で40年の長きにわたり曲がりなりにもいわゆる研究教育に従事してきましたので、その後宮崎県林務部に1年、新設の県木材利用技術センターで2年間所長を経験したとはいえ、未だに大学研究者としての力を破ることの出来ない人間であります。また、私の研究者としての専門分野は、林学ではなく、林産学、その中の木質材料学という分野であります。このようなことから、森林を総合的に研究する当研究所の理事長としての任務を十分に果たせるか、いささか不安も感じております。しかし、私なりの職務の果たし方もあるかと考え、理事長をお引き受けした次第です。本研究所の輝かしい100年の歴史を汚さぬよう、皆様のご協力を得て精一杯努めて行きたいと思っています。

森林総合研究所が独立行政法人に移行して既に4年が経過し、本年度は第1期中期目標を達成させる最終年度に至っております。この17年度は、昨年末に出された「見直し」について適切な対応策を検討するとともに、次期の目標に向けて、新たな計画を設定し、研究所の業務について調整・確定することが中心的課題になると思います。

当研究所の優れたところは、組織として森林・林業・木材研究が一体化していることです。特に法人化に当たって横断的研究の実行を容易にした重点課題の設定、それを担当する研究管理官を經常研究のラインから独立させた組織再編は、すばらしいものであったと思います。縦糸となる研究領域を担当するラインと横糸になる重点課題研究チームが織りなす面としての森林・林業・木材研究体制が十分に生かされるよう期待します。第2期中期目標にもとづく魅力ある重点課題の選定と有機的なチーム編成、そしてこれを統括する研究管理官の活躍、これを支える研究領域ラインの頑張り、地域課題への各支所の特徴のある取り組み、さらには豊富な外部資金の確保、等が独立行政法人森林総合研究所の今後の発展の鍵を握っているものと考えます。

私は、研究機関における最も重要なことは、そこに新規性の高い優れた研究が多数とぐるを巻くように存在し、研究者が常に生き生きと毎日の研究に取り組んでいることだと思います。そしてこの状況を実現するためには有能な事務機構の働きが極めて重要であります。

以上、新任のご挨拶を申し上げます。当研究所のあり方について、理解不足による誤りを述べているのではないかと懸念いたします。ただ、私の森林・林業・木材に対する深い思い入れをご理解いただければ幸いです。宜しくお願い申し上げます。



[\[巻頭言\]](#) [\[解説シリーズ\]](#) [\[報告\]](#) [\[おしらせ\]](#)

[\[所報トップページへ\]](#)